

1 1月総評 西躰 かずよし

今月も多くの作品が寄せられた。皆さんの作品をとおして書くことの意味を考えさせられた。惹かれた作品をいくつか。

セブンティーンアイスの
グレープシャーベット
自死からいちばん遠いところに 松下 誠一 東京都

なぜ自動販売機のグレープシャーベットアイスが自死から一番遠いところにあるのかはわからない。でもグレープ味のアイスクリームを苦手な子どもはいないと思う。生の美しさとはかなさが感じられる作品。

ルールは守るべきものと鳴く蟬が
白線のうちでじょうずに死ぬ 藤ほたる 神奈川県

作品に描かれるのは生の軋みのようなものである。そこから語られる幻想的な風景は、切実さという点において読者を惹きつける。同じ作者の「ただずっと雪のふる礼拝堂で／鮮血をながす私がついせつ」や「トイレのマークの人が溺れている／燃えているはるなつあきふゆ」といった作品についても同様のことが言える。

(圏外から電話がかかって来たと
きは神かわたしで多分わたしだ) からすまあ 神奈川県

この作品を読者に対する言葉と読むのかそうでないかで、私が電話をかけるのか、私に電話がかかるのかの二通りに読みは別れるが、私は前者で読んだ。「多分わたし」という断定を避けた言い方を用い、規範(神)の不在という今の時代の雰囲気をもうまく表現している。作者のほかの作品には「駄目だって言ってるのに／詩になりたがるきりん」、「rrrrrrr〈どうしたの〉／光が〈ひかり?〉／漁船」「崩れ落ちるカレンダー／燃え尽きそうな火／瞼を／ひらく。」といったものがあるが、シュールな書きぶりでありながら、形而上学的な問いが、作品の根底には流れているように感じる。

遺伝子の青の部分を吐き出せば

閉じられてゆくいくつかの窓

まちりこ

埼玉県

現実には存在しない風景であるにもかかわらず、それをリアルに感じさせるのは作者の力量だろう。閉じられていくいくつかの窓は語り手の何を表しているのだろうか。そこには静謐さのなかの穏やかな時間が感じられる。この作者のほかの作品には「片方の靴だけ売られている街の／見えないものにぼくはなりたい」、「ペダル漕ぐ音を静かに聴いている／ここはわたしの夜の外側」といったものがある。

ながればし

あなたのかたちしてひかる

広田 土

大阪府

小さな子どもが、とおくにいる母の姿を流れ星に喩えて詠んだかのような書きぶり。ここまで書かれると、書かれたあなたは恥ずかしいかもしれないが、書ききったことで説得力が生まれた。

みずからの過去に楔を打つように

一人称をわたしに変える

さいう

愛知県

「イヤフォンを外し／いちめんの菜の花」「ティディベアを抱え直して／いもうとは雨降る／冬の街を見つめる」といった作品のように、みずみずしい情景を飾り気なく詠うのが、この作者の持ち味と言えるが、ここに挙げた作品は少し色彩が異なる。「一人称をわたしに変える」というフレーズには、これまでの私との決別と青春の屈折のようなものが感じられる。今後の新たな展開が楽しみである。

